

大学生の一般的授業選択態度と成績との関連(2)¹

一般的授業選択態度における性差

牧野幸志・Roger Williams

Relation between types of student general attitudes on selecting classes and academic grades (2).

Gender differences and general attitudes on selecting classes

Koshi Makino and Roger Williams

Abstract

The purposes of this study were to investigate the gender differences of students' general attitudes on selecting classes and relation between those types and academic grades. Undergraduate students ($N = 243$) took part in this survey by completing a questionnaire. The main results were as follows: (1) Three factors were found about student's attitudes on selecting classes, that is, "Preference to easy class", "Excellence of class contents", "Utility of class contents". (2) Female students received higher examination scores than male students. There was no difference in the three factors based on gender. (3) Students who attach more importance to "utility of class contents" received higher examination scores than those who attach less importance. These findings mostly support Makino (2001d).

Key words : general attitudes on selecting classes 一般的授業選択態度, academic grades 成績, gender 性, university students 大学生.

問 題

大学「全入の時代」を目前にして、大学教育は過渡期を迎えている。従来、大学は研究機関という位置づけが強かったが、大学進学率が高まる中、大学は大衆教育化している。このような状況の中で、大学への進学理由や勉学に対する態度も大きく変わってきている。「勉強をしたい」という本来の目的をもち進学する学生は少なく、「みんなが行くから」、 「まだ就職したくないから」、 「なんとなく」などの理由で進学する学生が多く存在する(刈谷, 1995)。また、進学理由が不明確なために、大学生の学習態度も問題となっている。例えば、授業中の私語、居眠り、携帯電話の使用など授業中の態度が問題視されてい

¹本研究は、平成13年度私立大学等経常費補助金「教育・学習方法等改善支援経費」の援助のもとに行われたものである。

る（水野，1998，1999）。さらには，大学生の学習意欲の低下，学力低下などのより深刻な問題も指摘されている（井上，1993；豊田，1999）。

このように，現在，大学への進学理由，大学生の学習態度は多様化しており，大学側も授業方法，授業内容などに工夫を施す必要がでてきている。大学生が授業を選ぶ際に何を基準にするのか，どのようなことを重要と考えるかという授業選択態度にもさまざまなタイプがあることが指摘されている（松田・三宅・谷村・小嶋，1999；三宅，1999）。例えば，大学生生活を楽しむことを最優先に考え，単位のとりやすい授業を取る学生もいれば，授業の内容を重視する学生もいる。このような授業選択態度のタイプを把握することができれば，大学生が授業に対してどのようなことを期待しているかが明らかとなるであろう。また，近年，多くの大学で導入されている学生による授業評価（牧野，2001a，2001b，2001c；松田他，1999）においても，学生の授業選択態度と授業評価との関連を検討することが可能となる。

三宅（1999）は，国立大学の学生を対象にし，授業選択態度の実態をクラスター分析によりタイプ分けを行なっている。その結果，大学生の授業選択態度に5つのタイプを見いだしている。三宅（1999）は，それらのタイプにより成績が異なるかを検討した。その結果，積極的な授業の選択基準を持たないタイプと単位の取りやすさだけを重視するタイプにおいては，優を取得する学生数が他の成績（良，可，不可）を取得する学生よりも少なかった。また，教官の人柄や授業内容を重視するタイプでは，優を取得する学生数が他の成績（良，可，不可）を取得する学生よりも多かった。しかしながら，三宅（1999）においては，対象となった授業が必修科目であったこと，調査対象となるクラスが複数存在し，異なる教官が異なる評価基準で成績をつけているという問題点が指摘された（牧野，2001d）。

牧野（2001d）は，三宅（1999）を参考にし，授業を選ぶ際にどのような基準で選んでいるかという一般的授業選択態度の構造を明らかにし，授業選択態度と成績との間にどのような関係があるかを検討した。なお，牧野（2001d）のいう一般的授業選択的態度とは，「大学生が，普段，授業を選択する際にどのようなことを重要と考えているか」という一般的な態度であり，特定の授業を想定した選択基準ではない。牧野（2001d）は，一般的授業選択態度に3つの態度を見いだした。第1は，授業への参加がらくであること，単位が取りやすいことを重要視するという「単位のとりやすさ」因子であった。これは，大学生がいかにくくをして単位を取るかを考えているかを反映していると思われる。第2因子

は、「授業の内容がわかりやすい。」「担当教官が質問に答えてくれる。」など「授業内容の良さ」因子であった。第3は、授業内容が将来役に立つことを重要と考える「授業内容の有用性」であった。この因子は、大学生が授業で学んだことが将来どのように役立つのかを重要視していること、また、その有用性が授業選択の大きな基準となることを示唆している。

牧野(2001d)はこの3つの因子の得点をもとに大学生の一般的授業選択態度を分類し、3つのタイプを見いだしている。それらは、単位の取りやすさを重視する「単位の取りやすさ重視」タイプ、授業内容を第一に考える「授業内容の良さ・有用性重視」タイプ、授業選択の積極的な基準をもたない「消極的授業選択」タイプであった。そして、これらの一般的授業選択態度のタイプと成績との関係を検討した結果、試験の得点に関しては、授業選択態度のタイプによる差はみられなかった(牧野, 2001d)。また、一般的授業選択態度のタイプと成績評価との関係を検討した結果、「優」を取得した学生に比率においても、差はみられなかった(牧野, 2001d)。つまり、授業選択態度により成績に違いはみられなかった。これらの結果は三宅(1999)とは異なる結果であった。このような結果の理由として、授業を選ぶときの態度と実際に受講した結果の試験成績、成績との関連が薄いことが考えられる。つまり、受講中の学習態度や試験前の学習量が、成績に大きな影響を与え、受講前の選択する基準の直接的な影響は比較的小さいと考えられる。しかしながら、牧野(2001d)では被調査者が114名と比較的少なかったため、人数を増やす必要がある。

また、牧野(2001d)では、一般的授業選択態度における性差については検討していない。授業評価においては、女性の方が男性よりも授業を高く評価することが明らかとなっている(松田他, 1999, 三宅, 1999)。これは、女性が男性と比べて、厳しい評価を行なわないことを反映したものか、あるいは、一般に女性の学生の方が出席率が高いことがわかっているため、女性の方がより正確な評価を行なうのかもしれない。このような性差から考えてみると、授業を選ぶ態度においても性差がみられる可能性がある。また、男女の出席率が異なれば、その結果、成績にも差がみられることが予想される。

本研究では、まず、成績と一般的な授業選択態度の性差を検討する。女子学生のほうが授業にまじめに出席しているので、成績も良いと予想される。また、授業選択態度においても、女性の方が比較的授業内容を重視し、らかな授業を望む傾向が少ないと思われる。次に、一般的授業選択態度と成績との関係をみていく。本研究では、因子ごとに成績との

関連をみていく。因子ごとにみていくことにより、牧野（2001d）におけるタイプ別ではなく各因子の影響を検討することが可能となる。牧野（2001c）によると、成績は授業中の学習態度に最も影響を受けることがわかっているため、授業を選択する際の態度においては、成績は異ならないと予想される。

方 法

対象授業と被調査者

対象とした授業は、教養の選択科目であった。対象の授業には、すべての学部から学生が集まっていた。授業内容については、あらかじめ後期の授業開始前にシラバスの配布により、知らされていた。担当教官は、調査実施時点では教職歴1年6ヶ月の男性であった。

被調査者は四国地方の国立大学の教養クラスの受講生243名（男性122名、女性120名、未記入1名、平均年齢18.97歳、年齢幅18～24歳）であった。被調査者のうち、216名（89.3%）は1年生であった。ただし、243名のうち、最終的に試験を受けた人数は193名（男性94名、女性99名）であった。

質問紙の構成と成績

一般的授業選択態度項目 牧野（2001d）で使用された質問項目と同じものを使用した。それらは、大学生が授業を選択する際に、どのようなことを重要視するかを調べる項目21項目であった（詳細は後述）。これらの項目に対して、「あなたが、大学で、一般的に、授業を選択する際に重要となることについてお伺いします。あなたは、授業科目を選択するときに、以下のことをどの程度重要と考えますか？」の質問の後に「1. 授業の内容が日常の問題と関連している」などの項目を配列した。これらの項目に対して、「まったく重要でない」～「非常に重要である」の5段階で評定を求めた。得点が高いほど授業選択の際に、それらのことを重要視することを示す。

成績 学生の成績は、レポート（30点満点）と講義の最終回に行なわれた試験（70点満点）の合計点を利用した。試験は記述式であった。成績評価（優、良、可、不可）は、合計得点の結果のみで行なわれた。60点未満を不合格（不可）、60点以上を合格（60～69点を可、70点～79点を良、80点以上を優）とした。

手続き

調査は、平成13年10月2日、対象授業の初回オリエンテーションにおいて、「授業選択に関するアンケート」という形式で実施した。所要時間は、約15分であった。調査実施時は隣の学生から回答が見えないように席を離し、個人のプライバシーに配慮した。

結果

対象授業の形態と難易度

対象授業の形態 対象となった授業の形態などをTable 1 に示した。授業は一般教養の選択科目であり、学生はいくつかの選択科目の中からこの授業を選ぶことができる。授業は、教科書を用いて行なわれ、不定期に、担当教官が作成した「心理学コラム」が話された。対象授業の授業日は毎週火曜日2校時（10：30～12：00）であった。クラスサイズは、毎回180名程度であった。出席は、とられていなかった。

難易度 対象となった授業の試験受験者数、合格者数などをTable 2 に示した。試験は、最終回に記述式で行なわれた。試験は授業内容から出題され、70点満点であった。また、レポート課題が30点満点で課された。それらの合計得点を成績得点とした。合計点が60点

Table 1 対象となった授業科目の形態

科目内容	心理学概論
開講学期	後期
必修・選択	選択
単位数	2単位
曜日・校時	火曜日・2校時（10：30～12：00）
授業方法	教科書を用いた講義形式。不定期にコラムを提示。
単位の認定方法	試験の結果による。レポートを出すこともある。
出席の有無	無

Table 2 被調査者、試験受験者数、および合格率

被調査者数 ¹⁾	平均出席人数	試験受験者数 ²⁾	合格者数	合格率 ³⁾
243名	約180名	193名	154名	79.7%

注1) 被調査者は、第1回のオリエンテーションに参加した学生である。2回目の授業から受講を始めた学生は分析の対象外とした。

注2) 試験を受験した学生数を示す。したがって、被調査者の中で50名は受講をやめたか、試験を欠席した。

注3) 合格率は、合格者数 / 試験受験者数である。

以上を合格（単位認定）とした。試験受験者数を基にみると、合格率は約80%であり、この結果は、同大学で同時期に開講された他の授業と比べても同じくらいの割合であった。したがって、対象となった授業の単位認可はそれほど難しくなかったといえる。

一般的授業選択態度の因子構造

一般的授業選択態度に関する21項目の評定値に対して因子分析を行った（Table 3）。固有値1を基準とする因子分析（主成分法，バリマックス回転）を行い，2因子以上に負荷の高い項目，共通性が，300未満の項目を削除した。その結果，3因子構造と解釈された。第1因子は“出席をとらない。”，“居眠りをする事ができる。”，“試験前にあまり勉強しなくてもよい。”など授業への負荷が小さいこと，授業が楽勝であることに関する項目に負荷が高かった。これらを「楽勝授業」因子とした。そして，「楽勝授業」を示す7項目（ $=.742$ ）の平均を「楽勝授業」得点として算出した（1～5点，得点が高いほど，授業がらくであることが授業選択の基準となることを示す）。“単位がとりやすい”という項目は第1因子にも負荷が高かったが，第2因子への負荷の方が高かったため第2因子の項目とした。第2因子は“授業の内容がわかりやすい。”，“授業の内容が興味深い（おもしろい）”など8項目に負荷が高かった。これらは，授業内容を総合的に評価していると捉えられたので「授業内容の良さ」因子と命名した。これら8項目（ $=.748$ ）の平均を「授業内容の良さ」得点として算出した（1～5点，得点が高いほど，授業内容の良さが授業選択の基準となる）。第3因子は“授業の内容が将来役に立つ。”，“授業の内容が日常の問題と関連している。”など授業内容が実際にどのように役立つのかその有用性に関する項目に負荷が高かったため，「授業内容の有用性」因子とした。これら「授業内容の有用性」に関する4項目（ $=.634$ ）の平均値を「授業内容の有用性」得点として算出した（1～5点，得点が高いほど，授業内容が役立つことが授業選択の基準となる）。いずれの因子の信頼性も高い値であった。

Table 3 一般的授業選択態度項目に対する因子分析（バリマックス回転後）

項 目	因子 1	因子 2	因子 3	共通性
楽勝授業				
11. 朝早い授業（1時限）や夕方の授業（5時限）ではない。	.654	.091	-.004	.436
16. 居眠りをする事ができる。	.653	-.080	.006	.433
18. 出席をとらない。	.653	.008	-.035	.427
2. 休講が多い。	.643	.049	.015	.416
21. 試験前にあまり勉強しなくてもよい。	.568	.391	-.260	.543
19. 試験だけで成績が決まる。	.546	.090	-.027	.307
7. 同じ学科の友人が受けている。	.532	.056	.130	.303
授業内容の良さ				
8. 授業の内容がわかりやすい。	-.189	.711	.104	.552
14. 単位がとりやすい。	.422	.664	-.145	.640
10. 試験が簡単である。	.391	.649	-.221	.623
20. 担当教官がやさしい。	.254	.617	.016	.446
9. 黒板（あるいはホワイトボード）やOHPを用い、ノートがとりやすい。	.042	.532	.132	.302
13. 授業の内容が興味深い（おもしろい）。	-.290	.502	.280	.415
5. 担当教官がユーモアがあっておもしろい人である。	-.028	.502	.237	.309
12. 成績評価の基準（単位認定の基準）がはっきりとしている。	.166	.482	.285	.341
授業内容の有用性				
3. 授業の内容が将来役に立つ。	-.139	.080	.745	.581
17. 授業の内容が自分の専門分野に関連している。	.049	.024	.688	.476
1. 授業の内容が日常の問題と関連している。	-.150	.132	.678	.499
4. 教科書がある。	.200	.047	.509	.302
残余項目				
15. 担当教官が質問に答えてくれる。	-.312	.390	.457	.457
6. 受講生が、100人以下であり多くない。	.231	.221	.313	.200

n = 243

成績における性差，一般的授業選択態度における性差

受講生の性別により，成績得点に差がみられるかを検討した。成績得点に対して性別による t 検定を行なった (Table 4)。その結果，女性 ($M = 80.66$) の方が男性 ($M = 57.33$) よりも成績得点が有意に高かった ($t(191) = 8.30, p < .01$)。つまり，女性の受講生のほうが男性の受講生よりも成績が良かった。次に，この成績の差が受講開始時の一般的授業選択態度に関連するものかを検討した。一般的授業選択態度の 3 因子に対して，性別による t 検定を行なった (Table 4)。その結果，楽勝授業因子，授業内容の良さ因子，授業内容の有用性因子のいずれにおいても男女差はみられなかった。つまり，授業を選ぶ際に重要視することは，男女により差はみられなかった。概して，男女を通じて，授業内容の良さの得点が高く，楽勝授業を求める得点が比較的低かった。

一般的授業選択態度と成績との関係

一般的授業選択態度により成績が異なるかを検討した。各因子別に，一般的授業選択態度により成績得点が異なるか t 検定を行った。まず，被調査者を一般的授業選択態度の各因子得点の高低により分類した。各因子得点の上位 30% を高群，下位 30% を低群とし，成績得点に対して t 検定を行った (Table 5)。その結果，楽勝授業因子と授業内容の良さ因子に関しては，高低群間で成績得点に差はみられなかった (それぞれ， $t(120) = 1.58$,

Table 4 性別による成績と一般的授業選択態度の差異

	性別	
	女性	男性
成績得点 ¹⁾	80.66 <i>n</i> = 99	57.33 <i>n</i> = 94
	> **3)	
一般的授業選択態度 ²⁾		
楽勝授業	2.63	2.69
授業内容の良さ	4.15	4.15
授業内容の有用性	3.60 <i>n</i> = 118	3.53 <i>n</i> = 114

注 1) 成績得点は試験とレポートの合計点を利用した。成績得点は，100 点満点である。全体の平均値 (標準偏差) は，69.30 (22.59) である。

注 2) 各評定値は，1 ~ 5 点の得点を取りうる。

注 3) 表中の不等号は，2 つの評定値間のその方向に有意差があることを示す (t 検定，** $p < .01$)。

Table 5 一般的授業選択態度による成績の差異

	楽勝授業		授業内容の良さ		授業内容の有用性	
	低群	高群	低群	高群	低群	高群
	$M = 1.93$	$M = 3.37$	$M = 3.61$	$M = 4.67$	$M = 2.84$	$M = 4.22$
	$n = 62$	$n = 60$	$n = 61$	$n = 56$	$n = 67$	$n = 68$
成績得点 (標準偏差)	70.61 (22.08)	64.05 (23.66)	69.43 (18.40)	72.09 (21.78)	61.85 (25.28)	< ** 76.87 (18.13)

表中の不等号は、2つの評定値間のその方向に有意差があることを示す（t検定，** $p < .01$ ）

$n.s.$ ， $t(115)=0.72$ ， $n.s.$ ）。他方，授業内容の有用性因子においては，高群の学生（ $M = 76.87$ ）は低群の学生（ $M = 61.85$ ）に比べ成績得点が高かった（ $t(133)=3.96$ ， $p < .01$ ）。つまり，授業を選択する際に，授業内容がどれだけ役立つかなどを重要視している学生は，比較的重要視していない学生よりも成績得点が高かった。

考 察

本研究の目的は，大学生が普段，選択科目を選ぶ際にどのような基準で選んでいるかという一般的授業選択態度の構造を把握し，その授業選択態度における性差と授業選択態度と成績との関連を検討することであった。

大学生が一般的に，授業を選択する際にどのようなことを重要と考えているかを検討した。その結果，3つの因子が抽出された。これら3つの因子は，牧野（2001d）における因子構造とほぼ同様であった。第1の因子は，授業へ参加がらくであること，あまり勉強をしなくてもいいことを重要視するという「楽勝授業」因子であった。この因子は，牧野（2001d）と三宅（1999）における「単位のとりやすさ」とほぼ同様の内容を示していると思われる。これは，大学生がいかにくくをして単位を取るかを考えているかを反映していると考えられる。第2因子は，「授業の内容がわかりやすい。」，「授業の内容が興味深い(おもしろい)。」など授業内容の良さを選択の基準にしている因子であった。ただし，「単位がとりやすい」，「試験が簡単である」の2項目は，第2因子とともに第1因子にも負荷が高かった。この「授業内容の良さ」は，牧野（2001d）と三宅（1999）における「授業内容の良さ」と同様であった。第3因子は，授業の内容が将来役に立つことを重要と考える「授業内容の有用性」であった。これら「授業内容の有用性」の項目も，牧野（2001d）における「授業内容の有用性」と同様であった。これは，大学生が授業で学ん

だことが将来どのように役立つのかを重要視していること、また、その有用性が授業選択の大きな基準となることを示唆している。本研究では抽出された3つの因子は、牧野（2001d）とほぼ同様であり、三宅（1999）における因子構造とも重なるものが多かった。学生が授業を選択する際に重要視していることは、授業内容の良いかという点、授業内容が役立つかという有用性、その反面、らくをしたいという点であることがわかる。つまり、興味深いこと、将来役立つことを知りたいが、できればらくをしたいという態度があらわれている。各因子得点の平均値をみると、学生は授業内容の良さを最重要と考えており、楽勝授業であることはそれほど望んでいなかった。

受講生の性別により、成績得点に差がみられるかを検討した結果、女性の方が男性よりも成績が良かった。これは予想と一致する結果であった。次に、この成績の差が受講開始時の一般的授業選択態度に関連するかを検討した。その結果、楽勝授業因子、授業内容の良さ因子、授業内容の有用性因子のいずれにおいても男女差はみられなかった。つまり、授業を選ぶ際に重要視することは、男女により差はみられなかった。この結果から、成績における男女差は授業を受ける際に何を重要と考えるかという一般的授業選択態度によるものではなく、他の要因によることが考えられる。一般的に、出席を取らない授業において女子学生のほうが男子学生よりも授業への出席率が高いことがわかっている（牧野，2001a）。また、女子学生の方が男子学生よりも試験前に勉強することもわかっている（牧野，2001c）。このような要因により、本研究においても女性の方が男性よりも成績が良かったのであろう。

学生の一般的授業選択態度により成績が異なるかを検討した。その結果、楽勝授業因子と授業内容の良さ因子に関しては、上位群と下位群との間で成績得点に差はみられなかった。つまり、らくをして単位を取ろうと考えている学生とそうでない学生との間で成績に差は見られなかった。また、授業内容の良さを重要視して授業を選択する学生とそうでない学生との間においても成績に差はみられなかった。これらは仮説と一致していた。他方、授業内容の有用性を重視する学生は、そうでない学生に比べ成績得点が高かった。つまり、授業を選択する際に、授業内容がどれだけ役立つかなどを重要視している学生は、比較的軽視していない学生よりも成績が良かった。

牧野（2001d）では、授業内容のおもしろさを重要と考え、授業内容が将来役に立つことを重視していた「授業内容の良さ・有用性重視」タイプは、他の「単位の取りやすさ重視」タイプと「消極的授業選択」タイプと比べて成績に差はみられなかった。このタイプ

は、本研究における「授業内容の良さ」と「授業内容の有用性」の両方を重視する選択態度である。本研究の結果から考えると「授業内容の良さ」と「授業内容の有用性」の両方ではなく、「有用性」のみを重要視する傾向が高い学生が成績が良いといえる。これは、授業がどれだけ役立つかを重要視することにより、授業への関心、授業参加への動機づけ、さらには学習意欲が高まったためと推測される。この点については、授業内容の有用性と受講態度、自己評価、出席などとの関連をみていく必要があるだろう。

最後に、本研究の今後の課題として、以下の点があげられる。まず、本研究では、大学生が一般的に授業選択を行なう際の態度をとりあげた。その一方で、大学生が実際に選択科目を選ぶときに、本研究でみられた選択基準にどの程度注目するかを検討する必要がある。概して、授業内容の良さや有用性を希望しているが、実際に選ぶ状況でも同じことを同じ程度望むのであろうか。2番目に、一般的授業選択態度、授業中の学習態度、そして、成績との関連を検討する必要がある。本研究において、授業内容の有用性を重視する態度と成績の間に関連がみられた。しかしながら、そのメカニズムに関しては十分な結果が得られなかった。授業を選ぶ際の基準の中で、どれだけ役立つかということを重視する態度は、その授業へのもともとの動機づけ、授業への参加意志、授業中の学習態度に影響を与え、その結果、成績が良くなったことが予想される。授業選択態度と成績との関連をみる際に、受講生の学習態度を媒介要因としてとらえて分析を進めていくことが求められる。

引用文献

- 井上正明 1993 学生による授業評価の方法論的考察 大学の授業評価に関する実証的研究(8) 福岡教育大学紀要, 42, 277 - 291.
- 刈谷剛彦 1995 キャンパスは変わる 玉川大学出版部
- 牧野幸志 2001a 学生による授業評価と自己評価, 成績, 及び学生の満足感との関係 教養選択科目「社会心理学」の場合 高松大学紀要, 35, 1 - 16.
- 牧野幸志 2001b 学生による授業評価と自己評価, 成績, 及び学生の満足感との関係 専門必修科目「人間関係論」の場合 高松大学紀要, 35, 17 - 31.
- 牧野幸志 2001c 学生による授業評価の規定因の検討(1) 多変量解析を用いた因果モデルの検討 高松大学紀要, 36, 55 - 65.
- 牧野幸志 2001d 大学生の一般的授業選択態度と成績との関連(1) 一般的授業選択態度のタイプ分け 高松大学紀要, 36, 67 - 77.
- 松田文子・三宅幹子・谷村 亮・小嶋佳子 1999 学生による授業評価と自己評価, 授業選択態度, 及び成績の関係 教職必修科目「生徒指導論」の場合 広島大学教育学部紀要 第一部(心理学), 48, 121 - 130.
- 三宅幹子 1999 大学生における授業選択態度のタイプと授業評価, 自己評価, 及び成績の関係

- 広島大学教育学部紀要 第一部（心理学），48，141 - 148.
- 水野邦夫 1998 大学生の受講態度に及ぼす諸特性の影響について 日本心理学会第62回発表論文
集 375.
- 水野邦夫 1999 大学生の受講態度に及ぼす諸特性の影響について(2) 日本心理学会第63回発表論
文集 1025.
- 豊田秀樹 1999 学力崩壊 PHP研究所

高松大学紀要

第 39 号

平成15年 2月25日 印刷

平成15年 2月28日 発行

編集発行

高 松 大 学
高 松 短 期 大 学

〒761-0194 高松市春日町960番地

TEL (087) 841 - 3255

FAX (087) 841 - 3064